

## 穴掘って学ぶ足下の歴史

私の住んでいる土地の字名は、大字「兵庫原」・「栗野ヶ迫」・「入来原」です。この兵庫原（ヒョウゴバル）は、薩摩国府の兵器倉があったことに由来します。

昭和39年に高校に入学すると早速、薩摩国府の発掘調査に高校のクラブ員（高一時は同好会、高二時にクラブへ昇格）として参加いたしました。瓦葺きの国府の館跡の隣接地からは、竪穴式の国府のお役人に仕えていた民の住宅跡も出土しました。



薩摩国の設置は、大宝2年（702年）であり、薩摩国の国守には、万葉の歌人で有名な大伴家持も。彼の任命は天平18年（746年）正月となっていますが、当時権勢を極めた大伴氏一族ですから名前だけの任官で、この地に赴任したかどうかは不明です。任地に赴き「薩摩の国の〇〇と」一首なりとも万葉集に詠んでくれているならば、当地の文学的・観光的価値は数段と上がっていたのは確かはず。

大伴家持は、薩摩国の国守。その父で同じく万葉の歌人・大伴旅人は、720年（養老4年）に朝廷に抵抗していた隼人族を征定するために征隼人持節大將軍として赴いており、薩摩とは不思議に縁のある親子とも言えましょう。

※隼人族＝古代における南九州の土着民で、8世紀はじめまで大和朝廷に服属しなかった勇猛な民。平安京跡から出土した隼人の盾が有名。薩摩隼人・阿多隼人・甕隼人に三大分類されています。墓制上は、埋葬品が極端に少なく鉄製品の武器を埋葬品とする「地下式板石積石室」の主たち。川内川周辺に住んでいたのが、私たちの遠い祖先の「薩摩隼人」であり、総称して鹿児島県人を「薩摩隼人」と呼称する者が多いですが、真の歴史的な薩摩隼人は、川内人を指すと解するのが正しい（甕には甕隼人が）という私論を展開中です。

**次の頁の写真**は、平成18年2月の日曜日。午後から作業着に着替え、伸びに伸びた草取りを。大地への感謝の意味を込めて、裸足で草取り鎌をもって挑戦すること数十分。この取った春草を如何に処分すべきか考え、畑の真ん中に1m四方の穴を掘り、その中に草を放り込む作戦に切り替え、スコップ片手に、昔取った杵柄で綺麗に真四角なトレンチを。（消防局長就任直後、職員が結婚式への出席案内状を、彼女同伴で畑に届けてくれ、遺物説明口上をし、熱々の二人を見送り、作業を続ける中、目を上げると目前に黒煙が。慌ててバイクに飛び乗り局に出勤。作業着の上から防火衣をまとい火災現場に出場。国道3号線上に現場指揮所を設置した建物2件類焼の苦い思い出に残るの日の農作業中の一コマ）

わが大地は、前述したとおり国府に由来する場所。大体の所は、これまでに掘りつくしていたつもりでしたが、今回掘った場所は、これまで発掘調査を済ましていなかった残り少ない場所であったようで、50cmほど掘り進むとスコップに異常な「コッ」という軽い音が。スコップでの作業を中止し、手作業で掘り進むと、平安期の遺物＝甕・土師器・高杯の破片がまとまって出土してきました。

層緯的には、北かに南にかけて30cmから50cmの耕作土層があってその下が平安期の生活基盤層、そして粘土層、その粘土層を更に掘り下げると弥生層（今回発見の石鏃はこの層の遺物）。その下は河砂層となっています。

皆さんも貴方の居住している所の又は本籍地の字。大字・小字とありますが、歴史考古学上は、この字名から調べを進めていく方法もあります。ぜひ、皆さんも大字・小字に関心を持ち、古代のロマンに夢を馳せて見ませんか。「オイが住んどっとこいは？ウン百年前は！」という所も多々あるはずですよ。



## 薩摩国府の推定区域六町四方の中にあるロードマンの農場



六町四方の国府条理の真ん中の線  
三川内高校敷地の東側を北に延び  
ている道路で、東側が国分寺町、  
西側が御陵下町と町名も区分され  
ています。昭和40年の川内高校  
校舎新築基礎工事の際にも、遺物  
が出土してきて、工事を中断して  
もらい発掘調査した事が。



土がついた状態の遺物



高校・大学と学生時代は考古学徒ですから背広姿で机に  
向かうよりも麦藁帽子で作業着が似合いますよね。



水洗しますと1千200年余前の土器の様子が  
甕・小皿・高杯・小皿の上蓋等です



上の写真は、サトイモの土寄せ中に発見した「石鏃」(せきぞく: 黒  
耀石製の矢じり)です。

平安期の層の下は、弥生時代の粘土層となっていますのでその層の  
遺物が耕作により土表に。遺失物法により警察に発見届を提出した  
後、正式には個人蔵を認められることになります。